始

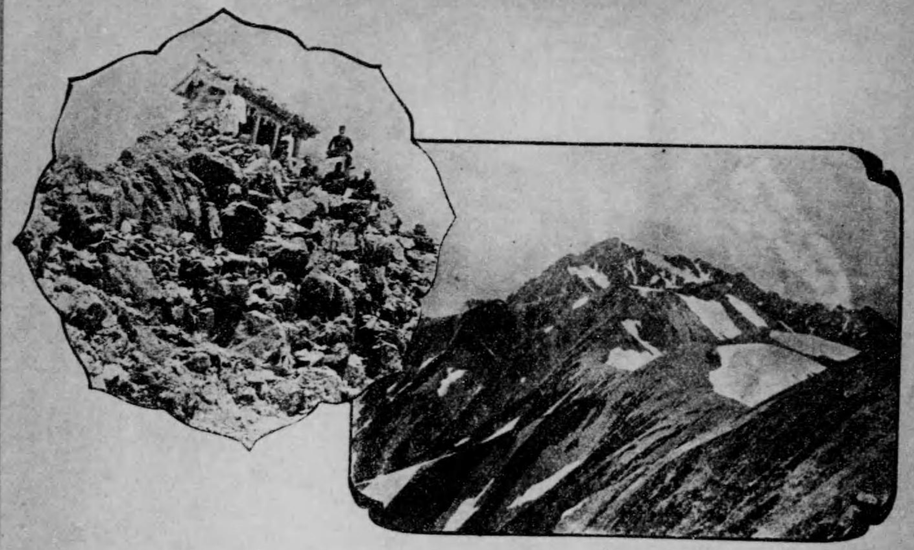
21
373

21-373

外國雄辯

要 輝 著

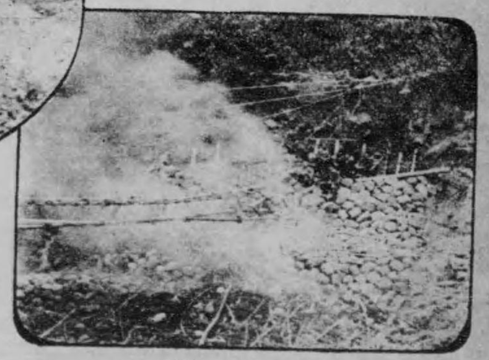
大正
4. 8. 6
內交



絶頂

劍山

温泉ノ本景



仝泉源

目次

一、立山論
附、立山登山會を設くべし
一、立山の靈峰たること
一、縣社雄山神社緣起
二、雄山神感應事歷
一、立山登山の順路及名勝
一、立山の研究
一、地質及鑛物
二、森林植物
三、立山動物
四、立山の氣象
一、立山と文學
一、立山土產物
一、登山準備及心得
一、登山會規則

凡例

一、本書は登山者の案内記として極めて簡單便利に編纂したるものにして成るべく無用の記事を避けたり

一、題字は雄山神社々司栂野安輝氏の揮毫に係る

一、本書は大井冷光氏著立山案内、淺地倫氏著立山權現、廣瀨謙次郎氏著越中の山と川、雄山神社々司栂野安輝氏所蔵記錄、日本山嶽志、日本アルプス、地學雜誌等を參照し同書に負ふ所少なからず詳細を知らんとするもの同書等を見らるべし

一、本會は本書に對し年々改訂を加へ袖珍用輕便の案内記を編成する目的を有するを以て同書に遺漏の點あらば御教示あらんことを廣く大方諸彦に望む

大正乙卯孟夏

立山登山會識

立山

立山論

立山登山會編纂

附、登山會を設くべし

試みに足一たび越中の境を離るれば越中として何等著聞するものなしと雖も雄大豪宕なる立山と全國到らざるなき富山の賣藥に依て越中を連想せざるもの無し、實に立山と賣藥は越中を代表せりと謂ふべし、更らに立山の雄大崇高なるに至つては天下其の比なしと謂はざるを得ず、之れ古來駿の富士加賀の白山と對稱せられ日本三大靈峰として著聞せらるゝ所以也、抑も立山は千有餘年の昔に於て國守伴黃門の歌詠に上り「立山に降りおける雪を常夏にみれどもあかずかむがらなら し」とありて早くより其の名を知られ、近世詩人龜田鵬齋依て「玉山璧立撫青空鐵鎖援雲摩月宮晚酌會仙壇畔雪朗吟飛下北溟風」と詠ぜられて一層其の名を著はすに至れり、若し夫れ著名なる歌匠詩人の述懷を網羅し來らば日も尙

ほ足らざる感あり、越中の俚歌に云ふ「越中立山大岩の不動に縄ケ池」と劈頭立山の第一名勝たるを誇り、此の崇高秀霊なる山氣に觸れて剛健の氣象を養成するにあらざれば男子たる能はずとして十三歳に至れば必ず同山に登り雄山の神に詣るべき慣習今日に至るまで現存せり、立山は越中の東方飛彈高原より連亘せる大山脈中にありて立山々脈の中央に蟠立し、後方は即ち信越國境の後立山々脈の並行するありて其間に黒部の峽谷を夾む、南山脈及其の分脈蒐集する北アルプスの一大山塊は俗に七十二峰を以て成立てりと稱せらるゝ如く、何れも高峻嶮嶮各海拔八千尺以上より一万尺に達し蟠々蒼穹を摩し千古の積雪は皚々として山容を飾り盛夏と雖も谿谷氷田を以て埋り實に壯觀を極む「ふるさとの人に見せはやたち山の千歳ふるてふ雪のあけほの」と宗良親王が越中御潜居の折其景勝を嗟歎して口ずさまれし如き雪の立山は實に日本に冠たりと謂ふべし、更に其の景趣の雄大幽邃にして多趣なるに至つては殆んど原人時代のそれに似て西洋人が日本アルプスの稱を下したるも亦た偶然にあらざるなり

（アルプスと云ふ語義は雪のある高き山と云ふことを意味して居るので、高大なる山脈の冠辭もしくは代名詞として今日一般に使用されて居る、アルプスは高山を意味する拉典語アルベスから來たのであるがアルプと云ふ語はアルプと同一でそのアルプは白を意味するアルプスの異語同義であるから之を綜合すると「白き高山」と云ふ事になる即ちアルバインステックといへば金剛杖の事であり、アルバインフロウワと言へば高山植物の事であり、アルバインクリメイトと言へば高山氣候の事になつて居るそれであるから日本アルプスと謂ふのも日本の高峻なる雪を戴ける大連嶺といふ意義で何れの山に限つた意でないから歐州のアルプスに隷屬するやうな意味が無い、更に換言すれば魁偉なる容貌高峻なる岩石、不滅の雪氷、屋梁の如き高原、迅急なる溪流を多く有する天然的長城はアルプス型の山岳と言ふべきである）

「日本アルプス山」は越後越中の境上より飛彈信濃の間に延縁たる日本々島の中央に盤踞ぜる大山塊にして南北廿五里東西二十里花崗岩帶と片麻岩帶との間に勝入せる火山岩帶を合せ三岩帶の錯交する處、日本國中の最正なる「深山幽谷」を成し「石劍鑽青」の四字は實に此の區域を代表せり、夏季の間には山中温泉の沸する所に人を見ることありと雖も

其の他の季節には遂に人間に會せず夏間と雖も人を見ざること時に半ケ月に渉ることあり、或は老檜、古落葉松間にライ鳥の怪聲を放ちて翺翔し、或は白雲の上に露出せる峯上に黄金色の鷲の雙翼を張りて冲け或は樹蔭にシャモイス(羚羊)に似たるカモシカの人を恐れずして餌を捜ぐり、或は深谿一二の人家が屋根に石を載する處など宛如たる彼のアルプスの景象なり、實に幽玄靈怪なる神祕境なり、更に彼のアルプスに見る能はずして此のアルプスに見得る動物は瀑布直下、カヤクヾリ鳥の巖樹の間に和鳴するもの花崗岩の清洌潺湲たる澗水に鯢魚の遲疑するもの是なり、而も彼の俗了せるアルプスが到底此のアルプスに及ばざる所は原人時代の景象なり、長老ウエストン曰く「日本アルプスの規摸は歐洲のアルプスの三分の二に過ぎずと雖も谿谷の畫の如く幽邃なると森林の雄大なるとに至りては正しく歐羅巴のアルプスに優れり、特に人間の爲めに俗化せざる點よりせばラスキン翁が歐洲の「アルプス」を頌讃せし莊嚴、雄偉なる所は全く日本のアルプスに遺存すと(地學雜誌)

立山は從來其の景象の雄大なるに依て詩人歌客の述懷に上り或は文人墨客の推歎する所となり其の文學的價値に於て其の名の高まれること前述の如し、尚ほ道者に依りて導かれたる登山參詣は越中人に敬虔の思想を附與し其の剛毅正直の精神を養ひ來れる効果は教育上に於ても甚大の價値ありと謂ふべし、北アルプスの稱ある立山は單に文學教育に資するのみを以て足れりとなすべき乎、否な〳〵吾人は此の雄大秀麗なる山岳に對して多大の期待なきにあらず、高山に於ける產物として其の動物、植物、鑛物より氣象上の觀測等に至るまで學術上研究に資すべきもの頗る多く隨つて其の經濟的價値も多かるべく無類の富源を伏藏せること論ずるまでもなく神祕的に研究する部面も廣しと雖も更らに物質的に研究を爲すべき餘地頗る多し之れ越中人が當然努むべき義務にあらずして何ぞや近來外人が立山を登攀し種々なる研究報告を爲せるものあるより愛山者の偶々來つて探險を試むるものなきにあらずと雖も未だ以て人跡未到の地を蹈破し富源を開拓するものすら無きは歎ずべきの極にして外人の努力にも劣れりと謂ふべし

登山會を設くべし

越中の地は其面積に於て平野四分の一、山岳部四分の三に當り東方の立山連嶺即ち越中ア

ルプスの山塊は實に越中の大半を占む、此等山塊の大半は人跡未到の域にして唯だ山靈岳神に委して人間の顧みる所とならず、二十餘里に亘る深綠の大森林や、猛鬼なる迷峯、萬年の積雪は一種の神秘境として自然の寶物視さるゝは前に述ぶるが如し、而も此の一大山塊に伏藏せる無限の大寶庫は人生無盡藏の富たるは言ふまでもなく志あるものゝ一日も看過すべからざる處にして越中男子が先づ之れが開拓に當り研究を進むべき責任ありと信ず、近來國の文明駸々たるに際し、此の神秘の大山塊に着目するもの少なからず、從來岩峰寺芦峰寺の神官巫家によりて立山權現として閉されたる立山も、明治十八年當時師範校教諭たりし地理學者篠田廣太郎氏(後に頓野と稱す)に依りて探險の初歩を着けられ、當時學生五六名頓野氏に隨つて立山連峰、後立山、劍山、黑部峽流、大蓮華等を踏破せるは少なからず日本の學界を裨益する報告を齎らしたり、同氏の感化に依りてや同校二十三年卒業生山本繁氏が山岳辯あり小藤博士と共に立山に入り藥王岳附近に於て玉滴石を發見し日本及び外國の學界に裨益を與へたる如き頻々として登山者を出し地學地質等の研究を進めたるもの年々多きを加へ新智識を以て同山を觀んとするもの多くなるに至れり、爾來學生の登山するもの益々多きを加ふ、明治三十年以後に至りては新聞記者にして同山に囑目するもの多く、高岡新報社主筆井上江花君の如き自ら探險團を組織して立山探險を試み尚ほ同山を以て足れりとせず、後立山に着目し黑部山一帶の探險に從事し毎年夏時に至れば必ず探險を試み前人未發の地を探り之れが報告を新聞紙に登載して公表せるが如き頻りに探險趣味を鼓吹し、越中アルプスの神秘境を闡明するに努めたり個人としては魚津中學教諭吉澤庄作氏が越中アルプスを踏破し時々動植物並に鑛物に關する研究を公表せる如き頗る後進學生に立山研究の趣味を鼓吹し、學術界を益したること甚だ多く、立山研究に關し其名頗る高し日清戰爭前後に當りては軍隊の登山するもの續出し、登山を以て勇氣を鼓舞し剛健の氣象を附與し、雄山神社に參拜して敬神愛國の志操を養ふを以て常とせり、斯の如く當今舊思想のみを以て立山を見ざるもの漸次多きを加ふるに至りたるは時運の然らしむる所にして大に歡ぶべき趨勢なりとす

是に於て乎吾人は越中に立山登山會を組織し有らゆる立山研究を試み、世間に裨益を與ふるの機關を建設するの切實なるを感ぜずんばあらず、縣廳には地理課の設けありて越中の

地理に關する調査を爲しつゝありと雖も未だ以て何等世間に裨益を與へなるを耳にせず、此等の研究は官民協力を必要とす、寧ろ民間篤志の人に依て其の目的を貫徹し得らるべきも、立山は登山に依りて剛健正直の氣象を養ひ獨立の精神を附與するに於て大益あるは古來より何人も認むる所にして國民教養上偉効あるは言ふまでも無く、又た文學藝術方面の應用に於ても文學者美術家等に裨益を與ふること吾輩の辯を要せず、其他地質地理の研究を始めとし動植鑛物の如き產物の多趣多樣なるに至つては筆紙の盡し得べき所にあらず、之れ吾輩が有らゆる方面より立山研究を唱道せんと欲する所以也、立山は最早や現代に於ては岩峅寺芦峅寺の神官巫家に賴て雄山參拜のみを以て事足れりとすべからず、宜しく大規摸を以て永久に立山登山會を組織し、其の本部を富山市に置き、一層登山を鼓吹し各國の登山者に便益を與へ立山の實地踏査を容易ならしむるに努むべし、是れ越中人が當然の義務なり、越中人は斯の如くして立山登山を鼓吹せざるべからず、越中人は斯くの如くして立山研究を大成せざるべからず、（越山生）

立山の靈峰たること

昔より駿河の富士（直立一二、三〇〇尺）加賀の白山（直立八、九四〇尺）と立山（直立九、八七一尺）を日本帝國の三靈山と稱し頂上に安置せる雄山神社は昔は立山權現と稱し天の浮橋より青海原を探りて國土を產み草木禽獸を生み萬物の祖先をも生み給ひし伊邪那岐尊と天照皇太神の岩窟に籠り給ひし時、天の磐戸を押し開き常世の闇を破り給ひし尊き手力雄命との二柱鎭まります綾に畏き社殿にて山峰の崇高秀靈なると共に國人の崇敬淺からざる社なり、其の緣記及び感應事蹟左の如し

立山雄山神社の緣起

越中の國、立山の峰は其昔し　天手力雄命が天降り玉ひし靈山にして人皇十代　崇神天皇の御宇麓熊主坂に社殿を築かせられしに用材一夜に石と化したり、四十一代　文武天皇大寶元年辛丑二月佐伯宿禰左衛門尉有若を越中守に任ぜらる、治廳は新川郡布施の保伏山に在りき、神あり、有若に告ぐ立山を開くべしと即ち奏問し勅命を奉じて甥男有賴に社殿營築を董さしむ時に大寶元年九月十三日なり有賴公の立山を開かんとするや、麓十有餘里の深

林を踏分け時としては險阻なる巖崖を攀登するの難のり、幸なる哉立山大神導くに猛熊を以てし遂に以て峰頂に至らしむることを得たり

抑も手力雄命は天界に在りて天祖天照皇太神が天岩戸に潛み玉ひしとき皇太神の御手を採り岩戸より迎ひ奉りて大地神人を補助し玉ひ且つ皇太神に請ふて天地神人の尊明に至らんことを誓ひ玉ひし廣大無量の神性に座せり、其後、天孫降臨、命も隨ふて此土に降り遂に此山に鎮り玉ひしかは神代より此山を多知加良山と云ひ又多知山と云ひ雄山と稱す

天平勝寶年中山麓流水荒れしかば立山神を祈りたるに忽ち和やかなる平流となれり、依りて「和ブ川」の名稱起り末流田畝を涵養するに至れり、新川の神と稱せらるゝは此れが爲めなり、天平勝寶元年九月幣帛を新川の神に奉られたるのみならず歷代の天皇、多く此神を崇敬せられ遂に延喜式内の官社ともなり貞觀十八年七月十一日從五位上を捧げさせられ後圓融天皇永德元年辛酉二月正一位に叙せられたり

光明天皇の御宸翰、櫻町天皇の御衣、御小袖、御冠、菊桐御紋幕を初め奉り正親町三條前大納言及び大伴家持卿の詠歌、並に武將武士の獻納品等、所藏の寶物少なからず又源頼朝公を初め足利、德川兩家に至るまで或は奉るに封田を以てし或は巡撿使を遣して幣帛を奉れり現在芦峅、岩峅の社殿は「建久年中大將軍源頼朝造營之」との書を存し當時社地數萬歩を此に附したりといふ文明七年五月十五日越中松倉城主社殿を修築し天正十一年八月越中國主佐々内蔵助成政四百五十俵の社領を加增す、十六年二月晦日前田筑前守利家更に百俵を加へ爾後峯本社末社三十二座及び兩峅社殿とも前田家に於て永久修繕することゝなり社家六十二名に給するに山林四十萬歩を以てせり

天手力男神は文布神衣の祖神なる天長白羽命の父神にして天日和志命　天羽槌雄命は其孫子に坐せり、然れは麓の村民六十歳以上の老婆は毎年十二月晦日夜、通夜して麻苧を績み新年元旦の幣として雄山神に奉ること上古よりの慣例なり、此幣を製する所の場所は一の社殿にして祭神は女体三体を主とし寄産場堂と稱す

茲に地名芦峅と云ふは雄略天皇の巻に倭文纒の足座に立ちしとあり即ち阿具良は芦峅の言の原なり又岩峅と云ふは神門開闢の功に因み盤牖の尊稱起れり

越中の國　男子十三歳に至れば必す立山峯に參拜し其剛性を全ふせんとし、諸國の人民登

山するもの亦多し

抑も、立山雄神の神德たる人をして男女其質を全ふせしめ天理人倫を全ふせしめ玉ふに在りて苦害を絶ち狂害を去り過罪心を救ふこと是れ此神の靈德なり然れば立山噴火の谷を以て奇瑞を顯はし人若し惡を戒め善に復り果して能く過罪を免かるゝときは死後之を導きて安樂の幽地に至らしむべしとは開山の有賴公に向て神託ありし所なり、斯る靈德ある立山大神の事なれば凡そ幸福を祈らんもの眞心以て此神德を仰ぎ峰本社、別山、後山、三峯八谷三十二末社の神前に參拜し且つ開山有賴公の鴻効を報じ深く崇敬を致すべきもの也

同神社祈願感應の御事歷摘要

當山御前の本宮は神代固有の靈場にして神威の浩大赫々たること古今に明かなり中世迷信に託せしも靈山奇瑞のあるを訛傳せしものなり敢て俗學凡庸の識る處にあらざるべし抑も歷世祈念感應ありしは朝野の史上にも顯然たりと雖ども今二三を摘要して神德の萬々分の一を記さん

◎清和天皇貞觀十八年新川神に從四位上を授け奉らる（三大實錄に見ゆたり新川神とは立山神社の別名なり）是れ貞觀十六七の両年天下一般風雨の天災ありしに特に立山に祈稔ありて同十八年感應御報祭の時に神位を授けられたりと云ふ

◎覇府源頼朝公は建久三年に大將軍となられし時本社御報祭として社殿及び諸堂を建築し或は御修繕を加ふと云ふ（當年より七百十一年前なり）

◎寛永十九壬午年（二百五十二年前）舊前田藩政より寺社奉行所を參詣せしめ加越能三州領内の五穀成就祭祈稗ありて其當秋豊穰の報祭を執行せられ三州より初穗米を毎家より供ふ慣例として明治御維新まで行はれたり

◎天保七八申酉年（六十七年以前）當國大凶作に際し天保九年當社に祈願せられ御感應ありて大豊年となり）當年より六十六年前なり）御郡奉行所より庄組十村役に達せられ越中一國初穗米を古例に依りて毎戸より獻納せしめられたり

◎明治三年舊前田藩廳大參事大屬を隨ひ參向し明治二年大凶作を惶み當社に祈年祭を行はれ御感應あり同秋報祭せられたり

前陳の如く本社には當國の天災地妖あるときは御祈念祭執行ありて國民安穩の守護を蒙る

事枚擧するに遑あらず夫れ昨年の凶作管内の惨狀如何とす今言を述るも心意寒し爲めに本縣長官を始め本社に臨時大祈年祭を本年六月に執行せられ當年の豊穣を授けられたるは本社の御感應の浩大なる事管内人民の知る處なり恐るべし愼しむべし

明治三十六年十月　　立山雄山神社

立山登山の順路

登山の路は越中富山市より瀧町を經て岩峅に達するものと、五百石停車場より岩峅寺村に達するものと二路ありと雖も何れも岩峅寺村より山麓の蘆峅寺村に宿して登山するを順序とす、

●●●●岩峅寺村　此地富山市より四里八町、五百石町より一里の所にあり、同村に入れば一大華表の鬱蒼たる森林中に見ゆるあり、傍に「雄山祠」と大書せり、華表より入れば前立社壇あり、宏壯且つ素朴なり、源頼朝の建立したるものにして特別建造保護物として美術上の參考品たり、社務所あり中語事務所あり、參拜者は同社前に於て登山の安全を祈るを例とす

維新前立山の僧房なりしが今は神官となり登山者の旅宿せしむる遺風を存せり、之より栃津の突山を望み常願寺川を右に見て横江村に達し布倉瀧、瓶嚴、千垣村の白山神社、死出の山、三途の川と稱する處を經て芦峅寺村に達すべし、行程三里

●●●●芦峅寺村　立山の山麓にありて海拔二千尺に達し、人烟密なる大村なり、曾て二十四坊の僧舍ありしが岩峅寺と同じく衆僧皆雄山神社の神官となりたるものにして佐伯を姓とし開祖名頼の後裔なりと稱せり、祈願所、大宮、若宮　開祖の祠等あり、何れも源頼朝の造營なり、境内地濶く老杉參差として枝を交へ翠嵐深き處晝尚ほ暗し、此地に立山參詣人旅舍取締所、中語事務所等あり、之より頂上に至るまで人家なきを以て登山準備は總て此地に於て調達するを得べし、姥堂の舊趾は同村にあり、之より藤橋に至るまで一里、路平坦にして人車を通ずべし、

●●藤橋　稱名川に架設せる釣橋なり、往古は藤蔓を以て架けたりし故此の名あり橋を渡りて忽ち嶄嚴崎嶇の嶮坂あり、有頼卿熊を追ひて此處に來りしに黄金色の猪現はれ卿を脊に乘せて川を渡せしが直ちに此地にて姿を失せたりと云ひ傳ふ、因つて黄金坂と稱す、それ

より草生坂に至る、名の由來は有賴卿飢ゑて藥草を嘗めし處なる故名けたりと此の二險阻を經て眼界稍開く所あり、之れを千手ヶ原と云ふ、藤橋より行程一里、

材木坂 直徑五六寸より七八寸に至る多角形の柱狀岩、路の縱横に横はり、自ら磴をなせるを見る、頗る奇觀なり、口碑に古へ女人此處に堂を建てんとして蒐めし材木の神靈に觸れて一夜に石と化したるなりと言ひ傳ふ、熊土權現の窟に水を賣る、登山者の渴を醫する所たり、鷲ヶ窟、美女坂(美女杉)あり六部落を過ぎて斷截坂となる、

斷截坂 は開祖有賴卿の雷獸を斬りし古蹟にて、有賴卿は此處にて正氣を失ひ、大汝神に醫藥を授かり給ひし靈跡にて立山に大汝神を祀るは、この因緣によると云へり、姥の溺穴禿杉を經て

山毛欅坂 に至る著しき峻嶮なり、約三町にして山毛欅平に達す、綠陰に女茶屋あり

假安坂 僅か一町許りなれど立板にて半坂の如し、此地植分布の一界線にして之より下は常盤木多く、之より上は落葉樹多し、坂を過ぐれば忽ち展望開け雲烟去來の彼方より有名なる

稱名ヶ瀧 を正面に望み得べし、此瀧は早乙女嶽より直下千丈恰も白布の懸れるが如く中間曲折して雲に入る天下の壯觀とす、有賴卿は此瀧の音を美妙なる念佛の聲と伏し拜み給ひしと傳へ、文覺上人も此瀧を慕ひし事ありと言ひ傳ふ、早乙女嶽、大日岳の綠滴る大森林は所謂立山官林の中堅にして斧斤の入らざる處なれば老樹の鬱蒼たる他に及ぶものなし之れより降つて小谿流あり

桑谷 と云ふ、昔有賴卿幣帛を作らん爲め桑樹を植ゑし地なりと、溪流清冽にして深山鶯の美音に耳を傾くべし、鍋かぶり杉、夫婦杉を經て不動堂に出つ、山毛欅坂より行程一里立山森林帶の終局とす、之より數町にして

彌陀ヶ原 に達す、廣さ三里四方に餘り頗る遠望に富む早乙女嶽、大日岳、近く雲表に聳ゆ、其の一隅に弘法茶屋あり、水清くして甘し、弘法大師の舊蹟なりと傳ふ、彌陀ヶ原は海拔五千尺巨大なる喬木を見ず、雜草綠壇を敷きたるに似たり、餓鬼の田と稱す處あり

追分 は彌陀ヶ原の樞點にて路三條に岐る一は立山溫泉に下るもの、他の二は室堂に到るものとす、最左方を採りて進む原の盡くる所より一大窪谿に入る、二の谷と云ふ、之より

一の谷を攀登すべし、鐵鎖十丈險絶言ふべからず、二の谷は小鎖にして一の谷は大鎖なり、鎖に縋がりて攀登するより他に路なしとす、嶮角を廻りて獅子ヶ鼻に達すべし、弘法茶屋より行程約一里

獅子ヶ鼻は恰も吼ひ立つ獅子の如き巨岩が萬丈の山腹より西に向て突出し其の鼻端より一の谷を瞰下せば神自ら戰く、昔弘法大師此の鼻端に正座して七日七夜護摩を修し鬼神を降服し給へりと傳ふ、大師が墨染の衣を掛け給へしと云ふ衣掛松あり、傍らの稍小高き窟に大師の像を安置す、之より鏡石に至る間、碁石坂、小松原、天狗平嶺等あり

鏡石は彌陀ヶ原より室堂に至る二條の道路の會合點にして獅子ヶ鼻を距ること約一里、圓形の玄武岩にして經九尺厚さ四尺に餘れり、口碑には有賴卿の姥某姥懷まで來りしも遂に神靈に觸れて進まれざりしより、せめては之より絶頂まで參拜せしめたしと投げ付けし已が鏡が此處に止りて化石せるなりと、之より鮮芝雪田を渉りて下市塲、大谷等を渡りて室堂に達すべし、行程一里

室堂は登山者唯一の合宿所にして海拔七千八百尺の處にあり、元祿年間加賀藩の造營にかゝり、間口五間奥行十間に餘る長屋なり、其の構造の堅牢なること烈風も覆すを得ず、堂内は莚を敷き數個の大なる爐を開きあるも間切りなければ登山者悉く雜居し雜魚寢せざるべからず、堂の一隅に雄山神社の社務所あり酒保あり、登山者には山錢を納めしむ山錢は神社までの案内料と宿料なり宿料は幾日逗留するも再び拂ふを要せず、登山者は酒保より器具を借りて自炊せざるべからず但し中語に命ずれば萬端の用意を整ふべし、飯は空氣稀薄なるを以て半煮の飯となる、注意すべきことなり、唯一の菜草はアザミの味噌汁也

地獄谷　室堂より東北の方十町を距て一大谷あり、綠ヶ池、美久里池を經て至るべし、兩池共水面の靜なること鏡の如し、地獄谷は周圍約一里の間滿地黄色を帶び硫烟高く上りて聲駱たる聲耳を劈き臭氣鼻を衝く、中に八萬居、鍛冶屋、紺屋、團子屋、戸閉、血の池など唱ふる地獄(噴火口の餘勢たりし硫氣孔)ありて彼方に燃上り此方に沸き返る、試みに石を投ずれば、激して音益々高く金剛杖を以つて地を突かば硫氣聲を爲して上る、此地より大日山に登る路あり、同地の硫黄鑛床は有らゆる硫黄鑛床を一處に有するを以て著名なり

三山めぐり

室堂の前に立ちて仰げは正面に巍然として峭立するは立山にして西南に近く聳立するは淨土山、立山より東方に矗々として峯を起して走ること一里にして頂上稍平なるを別山とす立山を雄山と稱するは此の二山よりも優秀なるを以てなりと、以上三山に登るを三山めぐりと云ふ

●●●淨土山　淨土山は海拔八千九百尺に達し室堂より頂上まで約一里、路雄山に比して容易なり、先づ雪田を渉ること十町餘にして怪岩起伏の急坂あり、攀登する亦た十町餘一巨巖あり御光岩と云ふ、雲煙瞑濛として尺寸を辨せざる時、此岩光明を發して登山者を案内すと云ふ、頂上に間口九尺奥行六尺の堂あり祭神は天日鷲命、長白羽命の二柱なり、一は稻禾一は衣帛を宰る神なり、古は阿彌陀堂と稱へ、立山御來迎を仰ぎし處なり、淨土山の東南に近く巉岩屹立、其高さ相若けり者を龍王岳と呼び五色ヶ原を遠望すれば旭日に映ずる草色の鮮麗なる言語に絶す、其の山麓に碧澤の湛ゆるを見る之を刈込池といふ、尙ほ龍王の山麓に砂石崩壞せる峻坂は即ち更々越のある所にして更らに遠望すれば針木峠より黑部谷の湯川の谷、立山溫泉等を下瞰し得べし、又曉天此山に登らば藥師嶽の山中なる有峯村より灯の明滅するを見ることあるべし、堂より西南の高原に登らば頗る高山植物に富むを以て之を御花畑と稱す、堂後の急坂を下りて直ちに雄山の懺悔坂に出つるを得べし此邊に角石を發見すと云ふ

●●●軍人靈碑　同山上にある軍人靈碑は吏上に赫々たる日露戰役に立山隊として名譽ある戰死軍人の忠魂を靈碑として不朽に傳へんが爲め明治四十四年に建設せられたる一大銅碑にして碑表「軍人靈碑」の四字は時の第九師團長男爵神尾陸軍中將の染筆なり、建設の當時第三十五聯隊及第七聯隊擧つて登山し其の登山紀念碑を頂上に遺せり

●●立山（雄山）　立山は海拔九千八百七十尺室堂より頂上までは一里八町と稱す、室堂の面溪を下り雪田を渡りて進むこと約十町懺悔坂を登らば岩梯子の如き路となる此途中萩ひ堂あり軈て一ノ越に至る順次二ノ越三ノ越を過ぎて五ノ越に至れば陸地測量部の一等三角點あり傍らに建立當時の名殘りなる石室あり、雄山に參ずるもの此附近に於て草鞋を脱がせられ尙ほ登ること數十歩にして絶頂に達す、縣社雄山神社は南面して建てられ、間口二間奥

行九尺屋上に瓦を葺き更に石片を覆ふ、祠内向て右は天手力雄命、左は伊冊諾尊を祀る、赤き幔幕に金繡の梅花を描き其の前に大なる神鈴を垂る、日露戰役紀念として東郷乃木兩大將の揮毫にかゝる二面の扁額を掲げ最と莊嚴に見受けらる

●●●●頂上の展望　壯絶快絶天下の全景を一眸の裡に集むるは實に立山峰頭の景なり巍然として白雲を戴ける白山を西にし、東の方巍然たる峻峰中に煙を吐く淺間山、南の方乘鞍鎗ヶ嶽の音峰相迎なり遙かに白扇倒に懸る富士の秀嶺を雲表に望み得べく其他關東の烏海山、盤梯山、妙高山、駒ヶ嶽、赤石山等の峻峯歷々として指點するを得べし、將た又た漂渺たる日本海は佐渡の一島より能登岬と共に脚下に迫まり、遠く露領に對する光景は天下亦た掌中にあるの觀あり、宜なる哉一たび峰頭に遊ぶものは此の雄大崇高なる山靈に接し天下を呑吐するが如き剛性英氣を養ふに足るべし、殊に旭日將に上らんとする時　夕陽の將さに謝せんとする時、千山萬谷の雲霞陽光に映じて變化の百態色彩の奇異なる實に名狀すべからず所謂御來迎の出現と稱するもの此の變化の裡に看取すべく眞に天下無比の壯觀を極む

●●御來迎　同山頂上より日出日沒の際し氣層の溫度及び溫度の不同より光線屈折し燦然たる光彩を放ち五色の靈雲鬱くと見る間に美麗なる紅色の輪形と變じ其中に彷彿として三体の神像出現するが如し之れ立山獨特の御來迎にして天下一品の奇觀なり

●●別山　立山絶頂を辭し五ノ越より徑を轉じて北方に岩上を跳りつゝ超ね行けば程なく大汝峯に達すべし、有賴卿大汝神を祀りし處なり、更らに峰を傳ふこと數町にして富士の折立となり、尙進めば岩角磊々たる眞砂嶽となる、之より別山に達し得べし海拔八千七百尺、頂上平坦にして帝釋天を奉ずる小堂あり堂前に周圍五丁餘の小池あり硯水の池といふ、半ば千古の雪を湛へて掬すれば清冽骨に激すべし、蓋し火口の遺址なりと

●●劍嶽　別山の北方一谿谷を隔てゝ巉然聳立する峻峯あり其形ち鋒芒を削りて雲漢に揷むに似たり、是を劍嶽とす海拔七千八百尺、上に天然の岩塔あり神斧鬼工の妙を極め、越中アルプスの風景に多大の光彩を添ふ如何に剛膽なる樵夫も山麓より一歩も侵すべからず、併し四十年陸地測量部測量官柴崎芳太郎氏、此處に攀登し非常の辛酸を嘗めて遂に絶頂未檢の神士を極め、中腹に四等三角點を樹立せり、同山は普通登山者の到らざる處にして探險者にあらざれば同山に到りたるものなし、故に三山めぐりを終はれは同山に到らずして直

ちに歸途に就くを順序とす、

立山歸途温泉路

立山登山者は三山をめぐり最初登山したる順路を下るべきなれど尚ほ山中見る處少なからず疲勞を醫する爲めと比較的平夷なる路を取るとの便より立山温泉に一浴して一日を費すもの多し、今温泉路を左に案内すべし

室堂より前に過ぎ來りたる路を辿りて鏡石に至る、之より直行すれば一の谷にて元と來りし路なり、故に左に曲りて進み姥懐にて冷き渓水にて足を浸すを得べし

乳母石　は猛虎の隅に嘯くが如き一大巨巖なり、口碑に有頼卿の乳母、卿を慕ふて立山に登り此處まで來りしに病起りて進む能はず石と化したるなりと云ふこと鏡石の故事に似たり、之より二十町餘にして彌陀ヶ原に出で追分に達すべし、夫より左折するを温泉路とす

原の盡くる處に一大嶺あり

松尾嶺　と云ふ、榛弁鬱蓊として落葉地に敷き歩行頗る難なり、半里餘にして嶺上に達す

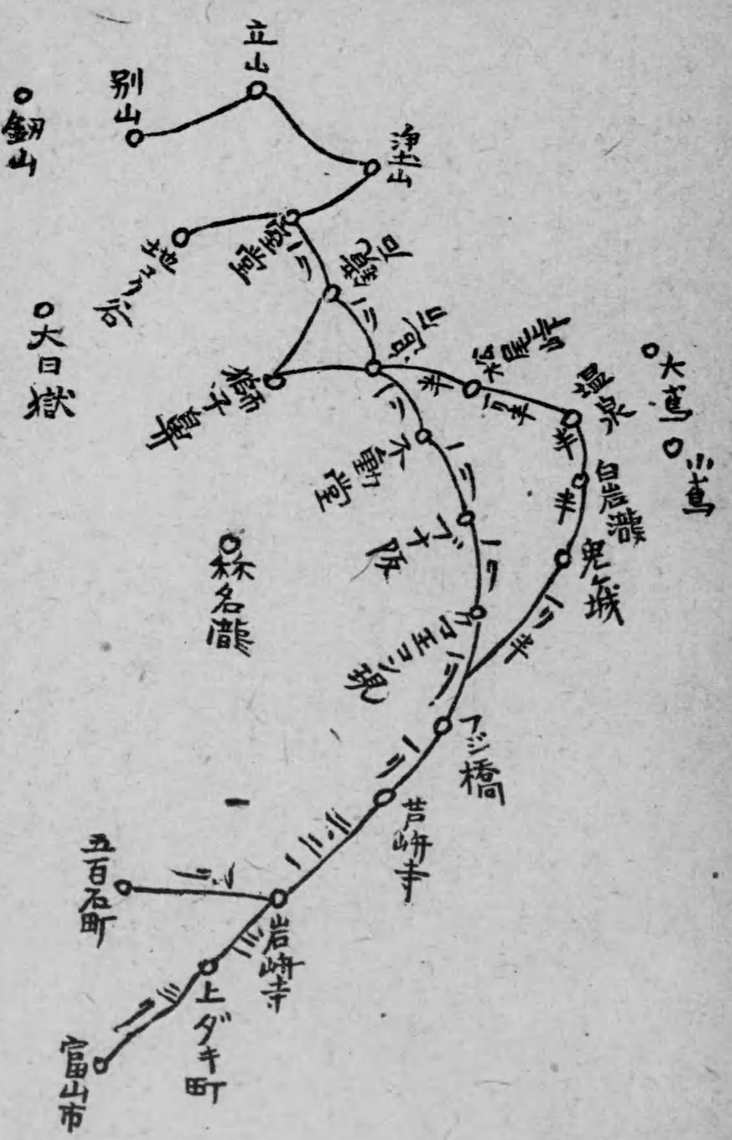
行く事數百歩にして温泉に下る坂あり、松尾坂又は湯の後坂と云ふ新崖危巖を攀ぢ下り漸く湯川の谿谷に達す頂上より此處に至る間約六十町、或る人曰く松尾坂を攀ぢざるものは共に天下の峻險を談るに足らざるなりと、坂の麓より湯川の流れに沿ひ一町餘にして温泉に達すべし、

立山温泉（多枝原温泉）　立山温泉は湯川の谿谷にあり、東は松尾嶺、南は鷲羽ヶ岳、西の方大鳶小鳶の兩岳を以て圍まれ恰も釜底に似たり、泥川の流れを後方に控ゆ、此地元と噴火口の址にして室堂を距ること四里、海拔四千四百尺なり、客舍數棟あり、萬端の設備整ひ夏時に至れば浴客充滿す、立山に温泉湧出の箇處頗る多し同泉は多枝原湯と稱し湯川北岸の岩際より湧出す、無色透明にして清澄、華氏百三十四度の熱を保てり、又多量の遊離瓦斯を含めり、一度び之れに浴すれは百憂を醫するに足る胃病、關節患、腺症、神經痛、外襲性患、黴毒、瘡毒等に効驗著るし、温泉主は目下中新川郡舟橋村杉田八郎右衛門氏にして元と同郡利田村深見六郎左衛門氏の發見にかゝりしが今より二十三年前同氏より讓受けたるなりと、

同泉藥師如來の緣起と稱ふるもの左の如し

立山温泉藥師如來緣起

抑も茲處に安置し奉る藥師琉璃光如來は湯元々祖中新川郡利田村深見六郎右衛門常に神佛の信心厚き人なりしが文政九年春の頃、晝の疲れに不圖眠りに就きしが夢とこなく現となく居間の内に光明輝き渡り金色の衣體麗はしきいと氣高き老翁忽然として現はれ給ひ、我こそは越中立山に深き因緣ある藥師如來なり、藥師嶽の下なる湯川の邊りに熱き湯の湧き出づるを以て衆生に功德を與へんと時節を待つこと千六百四十年の永きに及べり、汝立山に分け入り湯を開きて其の靈驗の著しきを諸人に示し病難苦難を救ふべし我は同國高岡町羽廣屋勘左衛門方に在り、とく〳〵迎へて守り本尊とせよと言ひ放ち給へ搔き消すが如く隱れ給へり、其の後同夢告を蒙りしこと再三あり、餘りの不思議と思へし折柄金澤表に御用の事あり其の歸るさに高岡に宿り試みに羽廣屋方を訪ね夢の御告を細かに語り出でしに勘左衛門も大に驚き我等も不思議なる前先きつ頃より同じ夢の御告げを蒙り居れり、されば拜ませ給ひと御厨子を開きしに尊像は行基菩薩の御作にて昔奈良の都の去る位高き方より授かりしものにて我が家の先祖より御守り申上げ供養し奉る尊像なり互に斯る御告げを蒙



りし上は疑ひもなき深き因縁のましますことゝて羽廣屋も快よく讓りれし故六郎右衛門は自ら尊像を申受け春負ひながら御供申したる不思議の靈像にて此處に祠を築き安置申し奉りし時は文政九年五月八日卯の刻なり、そも藥師如來は日光遍照菩薩月光遍照菩薩及び十二の神將掌へて現世には一切衆生の病苦を救ひましまし未來には法性無漏の極樂へ往生を遂げさせ給ふ御誓なりと聞けり、されば今度入湯の御面々は必ず疑ひなく信心を運び病氣平癒、後生善所の御利益を頂戴あるべきもの也

大鳶大鳶の両山は地震の爲め屢々崩壞したる跡を存せり、安政五年二月の大地震に搖り崩したる土砂湯川に堆積して流れを塞ぎ一大潴を爲せり四月に至り潴口缺潰し流水常願寺川に溢れて洪水となり、汎濫數里に渉る、川の沿岸百四十八の村落を浸し、家屋千六百十二土藏八百九十六を流し百五十餘の生靈を溺死せしめ、其慘狀思ひ出るも膽を寒からしむ

温泉附近の景趣 同泉附近には立山特有の珍奇なる産物少なからず且つ景勝頗る多きを以て探勝の客少なからず

新湯 は新地獄とも稱し湯川の南岸を遡り一里許りにて至るべく路頗る險惡なり左方苅込ケ池に降り小徑あり新湯は周圍四町に餘り新地獄又は孫池と稱す色帶藍白、三方山に包まれ一方僅に開く周圍の巖頭より熱湯湧き蒸氣溢る、干滴石(寶石にてハイヤライトと云ふ)は此の一帶の地より産せしことあり、此谿谷には縣涯飛瀑少なからず、景趣頗る幽邃なり

白岩瀧 立山温泉を出でゝ歸途に就き湯川を沿ふて下り半里許りにして湯川の一大瀑布となりて落下するあり、水流大巨巖に激するを以て飛沫巖頭に花を生じ壯絶快絶眞に大壯觀なり、目下工事中なる砂防工事は同瀑に當りセメントを以て大障壁を造り水流を潴留せしむるにありと云ふ、之より半里許りにて

鬼ヶ城 と稱する處あり斷崖湯川に迫まり自然の城廓を成せり、木年同處の山腹を削り新道を通じたれば路頗る平夷にして景勝亦た絶佳なり、此の邊飛瀑の落下するもの少なからず、畫題詩料に富めり

鬼ヶ城より藤橋に出づ温泉より三里の行程なり、之れより元來りし順路によりて蘆峅寺村に出で歸着するを得べし

信濃大町より登山するは普通の登山順路にあらずと雖も有名なる針木峠に登り龍王岳の麓に出で更々越を越ゑて温泉路に合し登山するを得べし、明治九年に開鑿したるものなりと

更々越 龍王岳の麓に削立せる丹壁にて砂石崩壞せる處なり、天正十二年の冬十一月富山城主佐々成政壯者五十餘人を隨へて立山に登り更々越の險を橇にて超へ信濃に出で遠江に到り家康に面じて歸途亦た同險を過ぎて歸城したる著名の險路なり

立山の研究

一、地質及鑛物

立山は地質學上片麻岩より成り處々花崗岩の現はるゝを見る、劒岳別山等の連脈皆な同質の山系なり、片麻岩系の山は太古界(渾混たる創世時代)に噴起せしものにして立山の絶頂は其の當時噴火口の殘壁なり、爾來幾萬年の間風雨の浸蝕等自然の變化を受けたること甚だしく且つ第三紀の花崗岩噴起により今日の如く巉嵓峭立の山相をなすに到れり、淨土山は第三紀の噴出にかゝる安山岩よりなる、同岩石は廣く室堂地獄谷より彌陀ヶ原の一部にかけて分布せるが地質學者は同時代に亦た一大噴火ありしを證せり

立山々脈の噴火 安政以前に於ては確乎たる記錄なきを以て知る能はずと雖も立山は慶雲元年(西暦七百四年)其の西部爆裂し、降つて天保十年四月二十九日(西暦千八百三十九年)現時の地獄谷を破裂し、鼠色の灰沙を降せしことありと謂ふ、(中略)安政五年二月二十六日午前一時大地震あり小鳶山を飛散し地獄谷を崩壞し常願寺川に押流し大慘害を蒙らしめたり(大井冷光著立山案内)

材木坂の岩石 は火山力に依て造成せられたる安山岩の柱狀節理で徑五六寸より七八寸位に至る多角形の柱狀を爲せり、其色褐色なり下野鹽原の材木岩と同質のものなりと云ふ、追分の角閃石は黑色柱狀の小結晶にて角閃安山岩なり、淨土山の角石は同上砂礫中に現はる、等軸晶系の正しき六面體にて軸長一分より五分に達するものあり漆黑色又は褐色にて光澤甚だ強し、地獄谷の硫黃鑛床は綠ゝ池、美久理が池等の往時噴火口たりし餘勢の今尚數多の硫黃孔となりて盛に亞硫酸瓦斯や硫化水素と共に水蒸氣を噴出し居る處にて本邦にある總ての種類を一ヶ處に蒐め居れり

立山村大字千垣村(海抜一千尺)より歩を進むれば兩側の山岳は固有の林相を失ひ或は熊笹の占領する所となり、或はウツキ、ヒロバウツキ、ネムノキ、カマスミ、コナラ、オヲカメノキ、等の生育するを見る、此地は暖帶林の盡くる所にして將に溫帶林に入らんとする個所たり、蘆峅寺村に至れば測高計は海抜千四百尺を示す、此邊一帶は杉の鄕土にして即ち溫帶林なり、更に進で藤橋(海抜千五百尺)を過ぎ黃金坂に登れば、ブナ、クラ、ゲヤキ、イタヤ、ホオノキ、オニクルミ、サワクルミ、カイデ、ミヅキ、シデ、ソロ、サハシバ、センノキ、ヒトツバ、トチ、キハダ、ツバキ、ランボナシ、クメカゼ、ヤマハンノキ、フヂアヲキ、シナノキ、ヤマザクラ、ウハミヅザクラ、クロモジ、ウリノキ、ドロヤナギ、等の濶葉樹鬱々として一大森林をなし、更に海抜二千尺に至ればブナ、リョブ、マンサク、ウツキ、カマズミ、現はれ、海抜二千三百尺に至れば栗消滅し、二千五百尺に至ればブナ及杉の生長稍强盛となり、海抜三千尺に至れば始めてミヤマシキミを三千二百尺に至れば始めてナ、カマドを見る、三千七百尺に至ればブナ杉最も强盛を極め、巨幹林立天を衝くの感あり、而して其の下にはシキミ、イモノキ、ウシコロシ等の灌木を生じ、三千九百尺に至りて始めてネズコの自生するを見る、四千尺に至ればブナ俄かに薄らぎ、其高も從つて減ず之に反しネズコの生長益々强盛を極め大なるものは至つては幹圍一丈五尺高さ二十間餘に達するものあり、而して此處にシャクナギの野生を見る、海抜四千五百尺に至れば姫子松の始めて自生するを見る、桑谷に至ればブナは僅に形骸を止むるに過ぎずしてクヌツケ、スンサク、ナ、カマド、リョブ、ウツキ、ミネカイデ、ヤマツ、ジ、等益繁茂し彌陀ケ原(海抜四千六百尺)に至れば姫小松の勢ひ著しく減退し熊笹雜草の占領する處となる、(彌陀ケ原は元鬱蒼たる大森林たりしに相違なしと雖も往昔地獄谷爆裂に依り樹木を滅亡せしか若くは山火事に依りて樹木を蕩盡し一大高原となりたるものならん)四千七百尺に至りて白樺を生じ四千八百尺に至りて梅を見る、五千尺に達すれば青森ト、マツの林生を認むるも姫子松の如きは地に伏して僅に其骸を存するのみ、此附近は溫帶林の盡きんとして將に寒帶林の區域に入らんとするものゝ如し五千四百尺に至れば杉、ネズコ已に消滅して梅、青森ト、マツの成長强盛となる、六千二百尺に到れば(姥懷の地點)ナ、カマド、樺、タケカンバ、白樺、ウタイカンバ、ヤマツ、ジの繁茂するあり、更に登りて六千五百尺に

玉れば栂既に盡きて、樺類も匍匐するのみにて偃松、ミヤマナ、カマド、之に代りて生育し、七千三百尺に到つて青森ト、マツ全く其の跡を絶ち、偃松獨り生育す、夫れより一大高原を經過し、一ノ越(九千五十尺)に至つて其の盡くるを見る、一の越、二ノ越、三ノ越、四ノ越、五ノ越を經て絶頂(九千五百尺)に至る間は寒氣酷烈風力强盛にして到底樹木の生育を許さゞる處とす(廣瀨謙次郎著越中の山と川抜萃)

立山の名を冠せる植物

(一)タテヤマウツボグサ(唇形科)、タテヤマギク(菊科)、タテヤマリンダウ(龍膽科)タテヤマワウギ(豆科)タテヤマスギ(沙草科)、タテヤマウツボグサ、タテヤマウツボグサ、花色鮮紫明麗溫泉附近に於て之れを見る△チヤウノスケサウ、高山の頂巨石骨間料たる處に生ず薔薇科に屬する短小なる木本にて花は白色、風姿高雅なり△タカネスミレ、花色の鮮黃醒むるが如し△イハヤシダ、之は熱帶性の草類で立山は產地の北極地なり其他イハウメ、ウラフラン、ヂムカデイハギキヤウ、ミヤマキンバイ、クルマユリ、チンクルマ、ツマトリサウ、サハラン、トキザウシラヲアフヒサンカエフ、キバナノコマノツメ、タカネヨモギ、テフジギク、イハツメグサ、ハクサンイチゲサウ、ヨツバシホガマ、ツガザクラ、ミヤマダイコンサウ、コケモ、アカモ、アカモモ、シロモモ、キンレイクワ等一々枚擧するに暇あらず(故長谷川泰治氏調査抜萃)

(二)平地で見る能はざる高山植生中珍奇なる種類にては△ムシトリスミレ、室堂西南四五丁濕洳の地にヤマスゲ、キバナノコマノツメと共に叢生す、花は鮮紫色にて閑雅なる容姿なり△タウヤクリンダウ、この越邊の山裏にあり葉は蘭に似て花は黃白色を帶び青色小斑點ありて鐘狀をなせり、山麓蘆峅寺にては山効草と稱へ腹痛の妓藥として珍重せり、味苦くして辣ならず芳香ありて口中爽なり實に靈藥たるに負かず△タテヤマウツボグサ

三、立山の動物

立山に產する動物中最も著るしきは熊にして最も珍奇なるは閑古鳥とす

(熊)立山本嶺附近より黑部峽谷に亙りて棲息す、他國產に比して其形小なるも毛漆黑にして、肉美味あり、冬季山麓の獵夫數名宛組を造り山に籠りて之れを捕獲す、其方法冒險的にして頗る壯絶なり

閑古鳥　立山三山より室堂附近に於て一見雉子の雌の如き鳥を見る仲語等は立山權現のお使なりと云ふ、雷鳥を誤稱せるなり、雷鳥は鵜鳥とも松鷄とも稱し松鷄科に屬する保護鳥なり夏と冬と其羽色を異にす、夏季は翼雌雄とも純白、尾は中央の二枝を除き黑色なり、他の季は雄にありては全頭、頸及咽喉諸部並に背面一體は黑色にして茶色の細かなる小紋數多あり、腹は白色なり、雌は雄に比すれば茶色に富み頭、頸、咽喉、全背及び腹側は黑と黃茶の橫斑なり、其他は雄に同じ、秋季一旦毬を經るときは雌雄共に總身純白となる、但し尾の外側の羽は黑色を存じ、又雄に限り眼の附方に黑色を存ず、之を此鳥の冬羽とす是れ冬間雪中に棲息するを以て敵襲を避くる保護色なるべし、尙雌雄共脚は趾頭に至るま

で羽毛を生ず、此鳥は本邦内産地の區域甚だ狹く僅かに信飛諸山の雪線にのみ殘留するが性質魯鈍にして捕獲し易ければ學者は其の絶滅を虞れ居れり、本邦中千島に至れば平原にこの鳥を產すと云ふ

四、立山の氣象

立山の氣象觀測に關し未だ精細なる研究を試みたるものなし、東京帝國理科大學に於ては近々立山の研究に取掛るとの事を耳にすれど、越中に登山會などの設けらるゝ曉には是非とも斯の方面に意を悉くすあらんことを切望して止まず

登山期の天候　立山登山期は普通に夏季と稱すれども、從來の例によれば七月二十五日の山開きより、九月五日山閉まで四十日間とす、併し七月に入れば登山に故障なし、同期中最も安全なるは七月二十日より八月中と知るべし、此間晴天最も多く十六日間晴天續きの例少なからず、立山の初雪は大概九月中旬にありとす

立山と文學

立山に關する詩歌文章甚だ多しと雖も今有名なるもの二三を掲ぐ

立山賦　首並短歌

大伴家持

天さがる、夷に名懸す、越の中、國内ことごと、山はしも、しじにあれども、いはしも、さはにあれども、皇かみの、ひしはきゐます新川の、その立山に、常夏に、雪ふりしきて帶はせる、片貝川の　清き瀨に、朝宵ごとに立つきりの、思ひすぎめや、ありがよひ、いや年のはに、よそのみもふりさけみつ、萬代の、かたらひぐさと、いまだみぬ、人にも告げん、音のみも、名のみも聞きて、とゞしぶるかね、

立山に降りおける雪を常夏にみれどもあかずかむからならし

片貝の川の瀨清く行く水の絶ゆることなくありがよひみむ

ふるさとのひとに見せばやたち山の千とせふるてふ雪のあけぼの　宗良親王

秋のきる衣や寒き雲のぬき雪の立山やま風ぞ吹く　堯惠法師

むかし誰れ夏より道を立山の雪に消にせぬあとは遺れり　同

雲霧もありてなければ神代よりひとり立山友もとめけり　契沖法師

立山の雪にまがひてあしくらの杉にゝれる水無月の雲　玉拾

雁がねはかへる道にや迷ふらんこしの中山かすみへだてゝ　西行法師

あなたふとうき世の塵も霧もはなれて高くたち山のみね　佐藤秀昌

越中立山　　龜田鵬齊

玉山壁立撫青空　鐵鎖援雲摩月宮　晩酌會仙壇畔雪　朗吟飛下北溟風

題

立山如玉立　上有太古雪　三伏炎蒸日　寒光猶凛冽　況此深雪時　望之皆欲裂　大窪詩佛

同

脚前七十一峰　雙手抉雲摩太清　履響凗然雪漢上　人間定聽步虛聲　高橋白山

同

山嶽　手捫鐵索蹈虛空　攀到層雪最上峯　下瞰群山總蒲伏　毛利半山

立山土産

立山は古來有名なる靈峯にして其の神秘境たるは前に述ぶるが如し、名物として立山の熊藥草（山効草の如き）等あり、登山者の土産として持ち歸るもの立山神授藥と稱するものより著しきもの無し、立山繪圖、立山繪葉書（一組七枚）、立山案内、立山と稱する冊子などは登山者に便益を與ふること大なり、神授藥と稱するもの十數方ありと雖も反魂丹、立山圓は左の由緒を有するを以て殊に著名なり、何れも富山市西四十物町酒井延良氏の製劑に係れり、

反魂丹は今より五百有餘年前後醍醐天皇の時京都に松井源長政春と云へる武士あり越中に來りて戸波（今の礪波）に忍び居たりしも其母難病を患ひ種々手を盡すも其効見はゝす此に於て原長親から立山に詣で祈願を籠めしに夢幻の中に雄山の神現はれ汝の孝心を嘉すとて妙藥及び其製法を授けられたり悅びて家に歸れば母已に死せり然るに之れを腹中に注入せしかば母蘇生して遂に癒ひたり反魂丹の名これより起り爾來靈藥として山麓の秘法たり後天和年間故あり備前の醫師萬代常閑翁に傳り時の富山城主前田正甫公に獻せしに公大に其靈藥に感じて全國各藩に行商せしむる事とせらるゝや時反魂丹の名大下を風靡せり然るに後世好商粗惡なる僞物を製出せし爲め名聲を傷ひたるも本方の秘法は前陳の如き歷史を有する靈藥にして其効驗の顯著なる一度服用せらるれば明りにして今其秘法を雄山神社栂野社司より傳授を受け專門の大家に讀り最新の方法を以て製劑したるものなりと

立山圓は開祖佐伯宿禰左衛門尉有賴公立山を開かれし時山中斷崖坂に於て雷獸を切り殺し桑谷に至らんとし俄に腹痛を生じ殆んど生氣を失ひ給へしかばかゝる深山のことゝて爲す方なく運を天に任せ心中に醫神大汝命を祈念し玉ひしに夢となく幻となく老翁頭上に現はれ其面前にある藥草を嘗むべしと告げ給ふ有賴公不思議の心地にて直に手を延し藥草を採り口に含み玉ひしに腹痛立どころに癒ひければ是れ大汝神の感應なりとて大に喜び起て桑谷に至り清水を呑みて身を清め天地を拜して其鴻恩を謝し玉ふ後この草を採り玉ひしに一種異樣の藥草にて山効草と名づけ玉へり有賴公は立山に社殿建造の時大汝命を其の側山に祠を建てゝ祀り玉ふ今の大汝山のは其遺績なり後世子孫この山効草を秘藥として調劑し如何なる病にも必ず之れを用て治せざることなしと云ふ古來立山傳來の秘藥なり

登山準備心得

登山者は岩峅寺村に着し同村より雄山神社境内たるを心得ざるべからず故に先づ同村の前立社檀を拜し其の無難を祈り夫れより芦峅寺村に至り大宮祈願殿を拜し翌日登山室堂に達

し地獄谷等の奇勝を極め一泊未明に頂上本社に參拜するを以て旅裝は成る可く輕快なるべし路嶮にして岩角を匍匐飛攀すべき處多きを以て脚袴草鞋かけは勿論着物は脊廣服か筒袖に莫蓙菅笠に必ず金剛杖を要す室堂にては炊事器具を貸與す飯米又は食麭其他の飲食物殊に室堂は夜間寒き故毛布及び襯の如きもの携帶せざるべからず尚人凡の品目を擧ぐれば金剛杖草鞋(數足)足袋(豫備を要す)脚袴、毛布、襯衣、胴卷、着莫蓙、菅笠、半紙、水筒、水碗、ナイフ、立山案内、磁石、時計、双眼鏡、提灯、扇、立山圖(清凉劑)飯米又は食麭砂糖、味噌、干魚、鑵詰、プランデー、果物、手帳等とす山に臨めは可成杖を應用し終始悠々歩調を取るべし(立山圓購買者には優待券を發行し室堂にて無料毛布を貸與すべし)と仲語は岩峰芦峰上瀧の事務所に付き雇人れらるべし社務所より規約を設け賃金を定め登山案内及び手荷物を負はしむ其重量は一人四貫目と制限せるも壯者は八九貫迄擔ふ故其際は相當割增を爲す仕組になり居れり

立山登山會規則

▼第一條本會は立山登山會と稱し本部を富山市に置く▼第二條本會は日本三人山峯の一たる立山登山を鼓吹し立山に關する有らゆる研究を爲すを以て目的とす▼第三條愛山の趣味を有するものは何人たりとも入會することを得▼第四條本會の會費は寄附金を以て處辨す▼第五條本會には會長一名副會長一名幹事若干名を置く▼第六條役員は互選するものとし任期は各二ケ年とす第七條本會は毎年七月總會を開き會務の報告を爲すものとす第八條本會は研究部登山部を置く▼第九條本會は樞要の箇處に支部を設くることあるべし▼第十條本會は毎年一回登山會務報告を印刷し實費以て會員に頒つものとす▼第十一條會長は此の規則に依り細則を設くることを得、大正四年七月定之

廣告

拜啓諸賢益御清榮の段奉賀候、本溫泉も大方諸賢の御引立に預り益繁榮に趣き候段奉謝候、却説御入湯諸士の厚意に酬ゆる爲め本年更に新道を開き從來より二里の路程を近くし又道路も平坦に修築相成候處尚進んで年々險路を開鑿一層の便宜を謀り度且つ本年は客室も增設致し又電燈をも架設の計畫中にて總て御待遇上に遺憾無之樣勉强致し度候間倍舊の御愛顧を願上候謹白

大正四年八月

立山溫泉湯元

廣告

弊舗發賣の雄山神授藥は歷史を有する傳法に依り原料を精撰し更に新進の大家に諮り製劑せる靈藥にして爾來江湖諸士の愛用を得益々販路擴大の域に赴き候段深謝此事に奉存候尚將來一層靈藥の靈藥たる所以を御試驗の上御服用被下度希上候謹白

大正四年七月

立山神授藥製劑本部

營業主 **酒井延良**

追而弊舗は配置及現金行商に付て簡易にし特殊方法設け有之候間御志望の御方は御來談被下度候也

大正四年八月三日印刷
大正四年八月十日發行

復製不許

正價金五錢

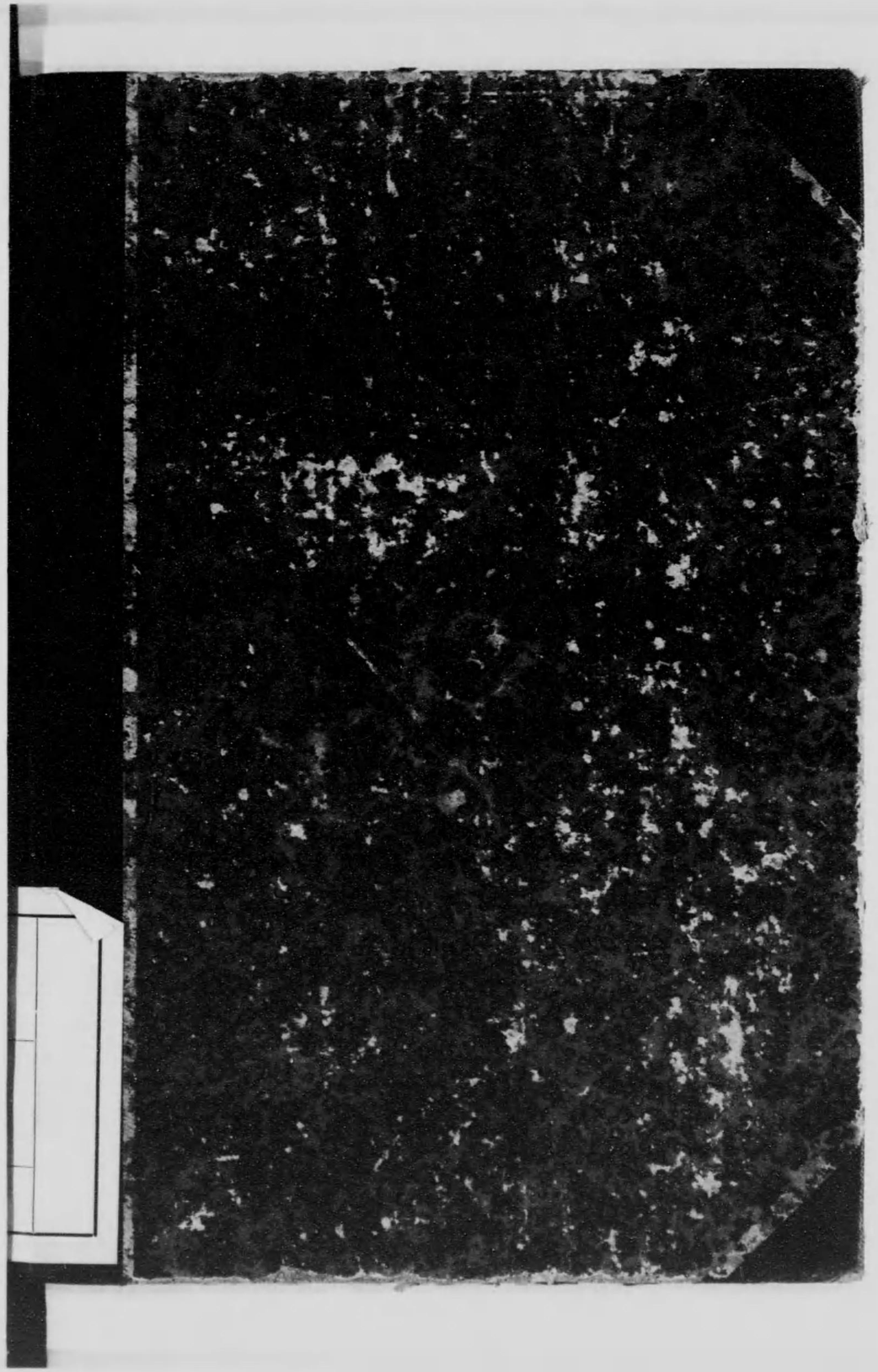
立山登山會代表者
富山市荒町二十九番地
編纂兼發行者　鶴見立吉

富山市山王町七八番地
印刷人　新村龜太郎

富山市山王町七八番地
印刷所　新村活版所

同市西四十物町二十八番地
發行所　立山登山會

立山温泉

21
373

終